

崖東夜話

第2部 魂のかたち 各施設の鼎談概要

(宗) アッサラーム・ファンデーション

■セッション・テーマ：ユーラシアを横断する魂のかたち

■鼎談の趣旨

西はイベリア半島から東はフィリピン諸島まで、イスラーム教がユーラシア全域に広がったのは8世紀から15世紀にかけてです。キリスト教の世界化に先駆けて、イスラーム教の世界化がありました。しかし、日本でイスラーム教が広がるのは比較的最近です。東京などの大都市で中東や南アジア、東南アジアからの移住者が激増し、多くのモスクが誕生しました。この数百年の時間差は、日本とユーラシアの距離を暗示しています。他方、かつてのイスラームの世界化が海路や陸路による交易と交流の拡大のなかで起きていたのと同様、20世紀末以降の日本へのイスラームの浸透も、貿易や労働力の国際移動の増大のなかで生じてきました。この交易や交流は、今、コロナ・パンデミックのなかで止まっています。集まることや交流することは、あらゆる宗教や精神文化、祭りと祀りの根本です。したがって、崖東夜話のサイトのなかでは最も新しい施設であるこの御徒町のモスクでは、集まることと魂のかたちの関係を考えていきます。私たちは、商うことや食べること、愉しむことと祈ること、弔うことの関係について考えたいと思います。同時に、御徒町とユーラシアの結びつきについても語っていきます。

■パネリストから一言

モハメッド・ナズィール (アッサラーム・ファンデーション代表)

御徒町にモスクを開設した経緯や東京のイスラーム教徒のこと、毎週の礼拝や地域とのつながり、日本とスリランカの関係についてお話しいただくところから始めます。

酒井啓子 (千葉大学教授、同大学グローバル関係融合センター長)

イラクやイランの都市でイスラームはいかに生きられているのか、グローバル化のなかでイスラームの生活はどう変化しているのかをお話しいただくところから始めます。

吉見俊哉 (コーディネーター 東京大学教授)

このセッションのキーワードは、「ユーラシア」「礼拝」「グローバルゼーション」です。イスラームを教義としてよりも生活様式、トランスナショナルな空間的实践として考えたいと思います。

■主なトピックス

ハラールのおいしいお店を見つける方法 (ハラール日本料理の輝かしい未来)

アッサラーム・ファンデーションにおける礼拝の日常

神社とモスクが似ているのはなぜなのか？ (似ていないところはどこか？)

シーア派とスンニ派は本当に対立しているのか？

イラク、シリア、レバノンにおけるイスラームの日常とは？

ユーラシア大陸のなかでイスラームをリマッピングする

日韓関係をイスラーム＝ユーラシア的に考えてみる

江戸川区で拡大するインド系コミュニティから東京を考える

御徒町 (下谷) はなんでこんなにすごいのか？

イスラームとアキハバラを結ぶ方法（アキハバラでハラールブームを起こす方法）

■参考文献

酒井啓子 『〈中東〉の考え方』 講談社現代新書、2010年
小杉泰 『イスラームとは何か』 講談社現代新書、1994年
吉見俊哉 『東京裏返し』 集英社新書、2020年

■プロフィール

モハメッド・ナズィール

宗教学人 アッサラーム ファンデーション (As-Salaam Foundation) 代表役員 一般社団法人 ジャパン・ハラール・ファンデーション (Japan Halal Foundation) 代表理事 有限会社 玉煌 代表取締役 Sapphire Gem Export Co. President 日本スリランカ評議会 (Sri Lanka Business Council of Japan) 前茨木副会長 ジュエリータウン御徒町会員

吉見俊哉

東京大学教授。専門は、社会学・文化研究。集まりの場でのドラマ形成を考えるとところから近現代日本の大衆文化と文化政治を研究。演劇論的アプローチを基礎に、日本におけるカルチュラル・スタディーズの中心的存在として先駆的な役割を果たした。主な著書に『都市のドラマトウルギー』（河出文庫）、『博覧会の政治学』（講談社学術文庫）、『万博と戦後日本』（同）、『親米と反米』（岩波新書）、『ポスト戦後社会』（同）、『大学とは何か』（同）、『トランプのアメリカに住む』（同）、『平成時代』（同）、『夢の原子力』（ちくま新書）、『視覚都市の地政学』（岩波書店）、『戦後と災後の間』（集英社新書）、『アフター・カルチュラル・スタディーズ』（青土社）、『五輪と戦後』（河出書房新社）等、多数。

酒井啓子

千葉大学大学院社会科学部教授、同大学グローバル関係融合研究センター長。専門はイラクを中心とした中東現代政治。主な著書に「9.11 後の現代史」（講談社現代新書）「イラクは食べる」（岩波新書）がある。

崖東夜話
第2部 魂のかたち 各施設の鼎談概要

寛永寺

■鼎談の概要

第1部「音のひびき」（声明のお話）を受けて、お経のもつ文字の力について宮部さんにまずお話いただく。

次に、キャンベルさんに加わっていただいて、宗教空間としての寛永寺における文字（たとえば天海版の紹介があってもよいかもしれません）と声を切り口にして、そこから江戸から明治までの上野の山というトポスの変貌（あるいは多様性）を自由に語っていただく。

第2部のテーマ「魂のかたち」に引きつけて、生者と死者が交錯する上野の山という場所自体が一つの「魂のかたち」なのではないかという視点を提示し、そうした場所が維持されてきたことの意味についてお話いただく。

■推薦図書

浦井正明 『「上野」時空遊行—歴史をひもとき、「いま」を楽しむ』

プレジデント社 <https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000003065809-00>

ロバート キャンベル 『東京百年物語 1 一八六八～一九〇九東京百年物語 1』

岩波文庫 <https://www.iwanami.co.jp/book/b376436.html>

齋藤希史 『詩のトポス』

平凡社 <https://www.heibonsha.co.jp/book/b222164.html>

■プロフィール

宮部亮侑

昭和50年東京都生まれ。大正大学大学院修了、博士（仏教学）。現在、東叡山寛永寺執事、寒松院住職、大正大学非常勤講師。専門は法華思想。著書に『天台仏教の教え』（共著、大正大学出版会、平成24年）など。

齋藤希史

東京大学大学院人文社会系研究科教授。専攻領域は、中国古典文学、東アジアにおける古典と近代。著書に、『漢文脈の近代 清末=明治の文学圏』（名古屋大学出版会）、『漢文スタイル』（羽鳥書店）、『漢文脈と近代日本』（角川ソフィア文庫）、『漢字世界の地平』（新潮選書）、『詩のトポス』（平凡社）など。

ロバート キャンベル

ニューヨーク市出身。専門は江戸・明治時代の文学、特に江戸中期から明治の漢文学、芸術、思想などに関する研究を行う。テレビでMCやニュース・コメンテーター等をつとめる一方、新聞雑誌連載、書評、ラジオ番組出演など、さまざまなメディアで活躍中。

【主な出演番組】

「スッキリ」（日本テレビ系）コメンテーター、「Face to Face」（NHK国際放送）MC 他

【主な編著】

『井上陽水英訳詞集』（講談社）、『東京百年物語』（岩波文庫）、『ロバート キャンベルの小説家神髓現代作家6人との対話』（NHK出版）他

崖東夜話
第2部 魂のかたち 各施設の鼎談概要

神田明神

■概要

伝統は創造されるものである。

神田明神では、様々な文化資源が人々によって見いだされ、生まれ、また心の支えとなってきたことを、神田祭とメディアミックスの2つの軸から語り合います。

■施設に関する書籍

岸川雅範、『江戸の祭礼』角川選書、KADOKAWA、2020年。

将軍家の庇護を受け天下祭と呼ばれた神田祭や山王祭。大手町、丸の内、日本橋などを氏子地域にもち、108の町会の総氏神である神田明神は、アニメ文化の発信地である秋葉原が近いこともあり、さまざまな作品の舞台や、聖地巡礼の場ともなっている。その歴史から、祭祀の始まり、大祓や節分といった季節の神事や行事、成人式、結婚式などのしきたりの創造、御朱印のルーツなど、江戸時代から現代へ連綿と続く伝統文化をひもとく。

■ゲストに関する書籍等

- ・名探偵コナン公式サイト

<https://www.conan-portal.com/#newsContent>

1994年に刊行が開始された青山剛昌原作の漫画『名探偵コナン』を起点とするアニメ、ゲームなど多様なコンテンツのポータルサイト。ゲストの諏訪道彦はこのほか、「YAWARA!」や「シティーハンター」など多くのアニメのプロデューサーを務めてきた。『名探偵コナン』の累積発行部数は全世界ですでに億を超えており、世界中の人々の心をつかみながら新しいテクノロジーを積極的に取り入れつつ変容し続ける現代の伝統の代表例である。

■コーディネーターに関する書籍

- ・『文化資源学』第14号（2016年6月発行）特集「文化資源学を支えるテクノロジー」

<http://bunkashigen.jp/journal/j014.html>

2013年から2015年の間、コーディネーターの中村雄祐が鈴木親彦とともに運営した、文化資源とテクノロジーの豊かな関係を多面的、実践的に考える「文化資源学の展望プロジェクト」の報告。文化財の復元やデジタル化、都市デザイン、神田祭、附け祭つくりもの製作に関する論考が収められている。

■プロフィール

岸川雅範

中村雄祐：東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻教授。読み書きに関する文理の基礎研究を踏まえつつ、文書という重要な文化資源を、調査研究の資料として、手段として、の両面から研究している。歴史学や情報学など研究者との学際研究や国内外でのアクション・リサーチを積極的に進めている。著書に『生きるための読み書き－発展途上国のリテラシー問題』（みすず書房）など。東京文化資源会議幹事。

諏訪道彦：株式会社 ytv Nextry 専務取締役、デジタルハリウッド客員教授。

大阪大学工学部環境工学科卒業。読売テレビ入社後バラエティ番組「11PM」を担当。東京支社編成部へ異動後、1986年「ロボタン」で初アニメプロデューサーとなり、1996年「名探偵コナン」TVシリーズを立上げ、翌年には劇場版を製作。アニメと音楽とのコラボレーションを「YAWARA!」や「シティーハンター」で展開し、従来のアニソンのイメージを刷新した。出版社、制作会社、声優、音楽業界に交友範囲が広く、アニメ業界屈指の名プロデューサー。

崖東夜話

第2部 魂のかたち 各施設の鼎談概要

ニコライ堂

■鼎談「横断する魂のかたち」の趣旨

ユーラシアを横断した信仰であるキリスト教、とりわけロシア正教を取り上げながら、「魂のかたち」をどう語ることができるのかを探る。おそらく「魂」は名詞というよりは、より動詞的なもの、さらには副詞的なものであることまで考えてみたい。

■鼎談の流れ（予定）

ミハイル対中秀行氏からは、東京復活大聖堂（通称ニコライ堂）の歴史を振り返っていただきながら〔中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』〕、日本での活動を通じて、どのように「魂のかたち」が論じられるのかをお話しいたします。

続いて山内志朗氏からは、東方キリスト教の意味、そしてイスラームによる媒介、さらには日本の修験道〔山内志朗『湯殿山の哲学——修験と花と存在と』〕といったユーラシアを横断する規模から、「魂のかたち」についてお話しいたします。

コーディネーターの中島隆博からは、内村鑑三が唱えた「日本的基督教」という独自の考えを紹介することで〔中島隆博『思想としての言語』〕、キリスト教の普遍性と多様性を考える枠組みを提示しながら、今日における「魂のかたち」を新たに構想してみます。

■参考文献

中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』、岩波新書、1996年

山内志朗『湯殿山の哲学——修験と花と存在と』ぷねうま舎、2017年

中島隆博『思想としての言語』、岩波現代全書、2017年

中村先生の書籍は、東京復活大聖堂の創始者であるニコライの個人史に焦点を当てながら、明治日本とは何かを論じたものである。山内先生の書籍も、スコラ哲学という中世キリスト教のひとつの極点から、日本の修験道のあり方を見つめなし、さらにその先にある人間の花するあり方を示したものだ。中島の書籍は、空海の真言密教からはじめ、内村鑑三の「日本的基督教」という独自のキリスト教のあり方に光を当てたものである。この3冊が交差するところで、「魂のかたち」の現代版を考えてみたい。

■プロフィール

対中秀行：日本ハリストス正教会教団・東京復活大聖堂教会主任司祭。ニコライ堂（東京復活大聖堂）の運営を担いながら、TRANS ARTS TOKYO 2016「湯島の杜と駿河台」への登壇や東京文化資源会議「湯島神田社寺会堂プロジェクト」に参画。

中島隆博：東京大学東洋文化研究所教授。中国哲学、比較哲学、表象文化論、東アジアの比較哲学。非常に幅広く、かつ精緻な議論を展開。現在刊行中のちくま新書の『世界哲学史』1～8の責任編集の一人。

山内志朗：慶應義塾大学文学部教授。西洋中世・近世思想、倫理学と形而上学など。メディア論的関心から、日本の修験道や、サブカルチャー、占い、アロマセラピーまでもカバーする。

崖東夜話
第2部 魂のかたち 各施設の鼎談概要

湯島聖堂（斯文会）

■セッションテーマ

「ユーラシア東西文化をつらぬく生命循環」

■鼎談の趣旨

「終末と再生の隠喩：生命循環」について、日本・中国・ケルト文明の芸術・思想・信仰を横断し、コーディネーターがゲストにお話をうかがうと形式で、以下の4つのトピックスをめぐって鼎談を行う予定です。

■トピックスと鼎談の内容の予定

一、「文様」と生命 コーディネーター：張 話者：鶴岡

東アジアでは長い歴史の中で、雷文や唐草など連続する文様が好まれてきました。形は違いますが、ヨーロッパ文化やイスラムにもペイズリー紋様、メアンダーや生命の樹など、連続・循環する紋様があります。コーディネーターはまず日本や中国の唐草文様を簡単に紹介し、その後、ゲストの鶴岡先生にケルトの連続する紋様をご紹介いただきたいと思います。

二、「音楽」と生命 コーディネーター：張 話者：鶴岡

西洋ではキリスト教が誕生してから、音楽は宗教儀式の一部になりましたが、中国では儒教に影響で、音楽は宮廷の礼楽と文人の自己表現のものになった。中国の音楽と生命との関係についてホストの宮本理事にお話をうかがいたいと思います。

また、古代中国では結婚式、葬式に音楽は演奏されていました。その場合、音楽のリズムは生命の連続、終末と再生の隠喩だと考えられます。その点では世界の多くの文化に共通しているが、それぞれ表現の形は違います。鶴岡先生にケルトの音楽と宗教や生命観との関係についてご紹介いただきたいと思います。

もし、時間の余裕があれば、楽器の東西交流についても触れたい予定です。中国の楽器のなかで、西域からきたものやあるいは中央アジア、西アジア、ヨーロッパの楽器と似たものをコーディネーターが紹介し、その後、鶴岡先生にケルトの楽器について話をいただきと思います。

三、「孔子廟あるいは湯島聖堂の役割」 コーディネーター：張 話者：宮本

湯島聖堂は宗教施設というよりは、学問所としての一面が強いのではないかと思います。人間の魂を善の方向に導くという意味では、教育でありながら、宗教的な側面もあります。人間の魂のあり方にかかわるという点で、孔子廟あるいは湯島聖堂の役割について、コーディネーターが宮本専務理事にお話しをおうかがいしたいと思います。

四、「生命、再生の思想」 コーディネーター：張 話者：鶴岡

東アジアでは仏教によって輪廻の思想がもたらされました。コーディネーターが鶴岡先生にケルトの再生の思想と生命循環についてお話をうかがいます。

まとめ コーディネーター

当日の話をまとめて、このセッションを終えます。

■プロフィール

宮本 英尚（公益財団法人斯文会・常務理事）：茨城県出身。慶応義塾大学法学部法律学科卒業後、三菱石

油(株)を経て菱華運輸(株)で常務取締役をつとめる。また、社団法人日本パワーリフティング協会専務理事および会長、NPO法人日本オリンピック・アカデミー監事、一般社団法人漢字文化振興協会理事および常務理事、公益財団法人斯文会評議員および常務理事を歴任。

張 競 (明治大学・教授)：1953年上海生まれ。東京大学大学院比較文学比較文化博士課程修了。國學院大學文学部助教授、ハーバード大学客員研究員などを経て、現在、明治大学国際日本学部教授。著書に『夢想と身体の間博物誌』(青土社、2014年7月)、『詩文往還』(日本経済新聞社、2014年10月)『時代の憂鬱 魂の幸福』(明石書店、2015年9月)などがある。東京文化資源会議・社寺会堂プロジェクト・メンバー。

鶴岡 真弓 (多摩美術大学・芸術人類学研究所所長/大学美術館館長)：芸術文明史家。ケルト芸術文化、およびユーロ=アジア生命デザイン交流史研究者。早稲田大学大学院修了後、アイルランド、ダブリン大学トリニティ・カレッジ留学。処女作『ケルト／装飾的思考』(筑摩書房)で、わが国でのケルト文明／芸術理解の火付け役となる。主著に『ケルト／装飾的思考』『ケルト再生の思想』(筑摩書房)など多数。訳書に『ケルズの書』(岩波書店、創元社)、『ミステリアスケルト』(平凡社)ほか。NHK テレビ「チョコちゃんに叱られる」「ユーミンのスーパーウーマン」、ラジオ「NHKカルチャーラジオ」「ラジオ版 学問ノススメ」など出演。ドキュメンタリー映画『地球交響曲第一番』でアイルランドの歌姫エンヤと共演。

崖東夜話
第2部 魂のかたち 各施設の鼎談概要

湯島天満宮

■鼎談の概要

第1部「祝詞」を受けて、ことだまという魂をやどした「言葉」について押見さんにお話いただく。また、湯島天満宮が「学業成就」「合格祈願」を願う多くの人々を惹きつけていることについて、その歴史や背景、場所の特性をお話いただく。近代化とともに大学街となった都心北部エリアで、「学問の神」が重視されることの意味を考えてみる。

■鼎談の流れ（予定）

文芸評論家の東雅夫氏に加わっていただいて、言葉の芸術である「文学」が、この世ではないもの、生きている人間の世界とそれ以外をどうつなげるかをお話いただく。（菅原道真、百物語などの例、死者と生者の交流など）。その中で、特に泉鏡花や、湯島を中心とした「崖東エリア」の話題をとりあげていただく。具体的な場所として、実盛坂、一龍齋貞水の旧居などのお話を、押見宮司からいただく。

「俗な空間と聖なる空間が広がるのが文化資源区のおもしろさ」をいかし、恋愛譚の舞台、芸能の舞台としての湯島、ならびに東崖エリア（「婦系図」、「湯島の白梅」、三遊亭円朝の「怪談牡丹燈籠」など）について、東さんに語っていただく。そのうえで、聖と俗、学問と娯楽、この世とあの世、といった両義的な場が、生きている人間やそれ以外の存在の「魂」をなぐさめ、活性化するうえで非常に力を持っていることの意味をお二人にお話いただく。

■プロフィール

横山泰子：1965年、東京都生まれ。国際基督教大学教養学部卒業、国際基督教大学大学院比較文化研究科博士後期課程修了。現在、法政大学理工学部教授。専攻は日本文化史、比較文化。著書に『江戸東京の怪談文化の成立と変遷』（風間書房）、『四谷怪談は面白い』（平凡社）、『綺堂は語る、半七が走る』（教育出版）、『江戸歌舞伎の怪談と化け物』（講談社）など。

東雅夫：1958年神奈川県生まれ。早稲田大学第一文学部日本文学科卒業。アンソロジスト、文芸評論家。早大市民講座講師。『幻想文学』と『幽』の編集長を歴任。2011年に『遠野物語と怪談の時代』で日本推理作家協会賞を受賞。著書に『文学の極意は怪談である』『百物語の怪談史』、編纂書に『泉鏡花〈怪談会〉全集』『文豪怪談傑作選』『平成怪奇小説傑作集』など。